

【原 著】

大学進学後の自立および適応と親の関与・自己決定との関連
—中学時代の部活選択を通して—

青木 多寿子 奥村 弥生 森田 愛望

Parents' Involvement and Self-determination in Junior High School Students' Club Decision
Making and its Effect on the Independence and Adaptability of University Students

Tazuko AOKI, Yayoi OKUMURA, Manami MORITA

2020

岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.10, March 2020

大学進学後の自立および適応と親の関与・自己決定との関連 — 中学時代の部活選択を通して —¹

青木 多寿子※1 奥村 弥生※2 森田 愛望※3

本研究の目的は、中学時代の部活選択における親の関与と自己決定のあり方が、大学入学後の自立や適応にどう関連するかを明らかにすることである。大学生に質問紙調査を実施し、180名からデータを得た（男性70名、女性110名）。分析の結果、中学部活選択における親の関与は、大学時の親への依存の高さ、精神的自立の一要素である判断責任性の低さと関連することが示された。また、大学生生活満足度については自己決定と性別の交互作用が認められ、女性の場合に自己決定が高いと大学生生活満足度が高いことが示された。以上の結果より、中学の部活選択が、時間を経た大学時における自立や適応に関連している可能性が示された。中学から大学にかけては、親子関係が変化していく心理的離乳の時期に当たり、その初期である中学時点において、親が関与しすぎず、親子関係の変化に対応していくことが、その後の大学時点での自立に重要である可能性が示唆された。

キーワード：青年期の親子関係、親からの自立、心理的離乳、親の関与、自己決定

※1 岡山大学教育学研究科

※2 中国短期大学総合生活学科

※3 唐津市立相知小学校

I 問題と目的

青年期は「親からの自立」を発達課題とし、親から分離し精神的自立が有意に上昇する時期である（福島, 1992）。それまでは親の庇護のもとにあった子どもが親から自立し、1人の大人として社会に出て行く時期がまさに青年期である（小野寺, 2014）。そのような過程は「心理的離乳」（Hollingworth, 1928）と呼ばれ、親子の関係性が変化していく時期とも言えよう。例えば、中学生から大学生までを対象に、青年期の親子関係の変化のプロセスを検討した落合・佐藤（1996）によると、中学生の親子関係では「親が子を抱え込む／親が子と手を切る」、「親が子を危険から守る」、「子が困った時には親が支援する」といった特徴が示された一方、大学生になると「子が親から信頼・承認されている」「親が子を頼りにする」関係が特徴となっているという。そして、高校生の時期には顕著に見られた親子関係の特徴はなく、その理由として高校生の時期に大きな変化が進行しているからではないかと推測している（落合・佐藤, 1996）。

このように親子関係が変化していくプロセスにおいては、それまで親が子どもをリードして様々なことを決めてきた関係性から、徐々に子ども自身で自己決定するように親子関係の変化が生じると考えられる。例えば、Smetana &

Villalobos (2009) は、青年期における子どもと両親との葛藤は、子どもが親の権限の範囲を再交渉しながら自律性を拡大しようとする試みの中で生じると述べている。そこでは、子どもが徐々に自己の判断や決定を主張するようになり、それに従って親は少しずつ子どもに主導権を渡していくようになるプロセスがあると考えられる。このような親から子どもへの決定主体の移行は、子どもの自立において重要な要素であろう。

奥村・森田・青木 (2019) は、進路選択を自己決定することが、精神的自立や大学生生活満足度の高さと関連することを示した。自己決定理論 (Self-Determination Theory) によると、自己決定性の高い動機づけは、より高いパフォーマンスや精神的健康と関連する (Deci & Ryan, 2002) とされており、様々な事柄に当てはまるものと思われる。そして、奥村他 (2019) では、青年自身が自己決定できない場合についても触れており、その場合は親も放置せずサポートした方が大学生生活満足度をあげるのにより可能性を示唆している。この「自己決定できない場合」の詳細は明らかになっていないが、誰もが皆、進路について自己決定できるわけではないということであろう。では、高校卒業後の進路について自己決定できるようになるには、どのようなことが必要なのだろうか。

高校卒業後の進路決定は、進学するにしても就職するにしても、その後の長い就労生活の方向性を決める自己決定である。人生に関わる大きな判断となる、この重要な自己決定ができるようになるには、それ以前に、より小さなレベルにおける判断を自分でする経験を積み重ねているに違いない。そのプロセスの中で、自分の自己決定に対して親からのフィードバックを経て修正したり、あるいは反発したりといったことを繰り返しながら、徐々に自立に向けた成長がなされるのではないだろうか。

そこで本研究では、青年期前期にあたる中学生の時期に着目し、判断事項をめぐる親の関与および自己決定と、その後時間をおいて大学生になった時点での精神的自立や適応との関連について検討する。これにより、中学生の段階での親子のやり取りがその後の自立に対してどのような関連を持つか検討することができるだろう。なお、本研究ではこの判断事項としては「部活の選択」を取り上げた。部活は中学生生活の一部であり、子ども自身の中学生生活や交友関係にも小さくない影響を及ぼす。高校卒業後の進路選択ほど重要ではないにしろ、中学生にとっては中学生生活全般に影響を及ぼす瑣末ともいえない判断事項である。また、過去を想起する方法で調査する際、比較的、鮮明に記憶に残っていて回答しやすいテーマだと考えた。この中学部活選択における親の関与と子どもの自己決定が、大学生になった時点での親子関係、精神的自立、大学適応にどのように関連するかを検討する。

II 方法

1 調査対象者と調査方法

奥村他 (2019) において回収したアンケートの内、未発表のデータを用いた。

調査対象は地方国立大学の大学生 188 名（男性 74 名，女性 114 名）である。調査は無記名で実施し（a）集団で行いその場で回収する方法と（b）知人に個別で配布し後日回収する方法をとった。2013 年 10 月に実施した。

2 質問紙の構成

（1）フェイスシート

性別，学年，年齢を尋ねた。

（2）中学時の部活選択における親の関与・自己決定

中学生の時と前置きした上で，（a）「部活動に入るか入らないか，またどの部活動に入るのか決めるとき，あなたの親はどの程度その過程に関与してきましたか」と問い，「かなり関与してきた」（8 点）から「全く関与してこなかった」（1 点）まで 8 段階で尋ねた。（b）「部活動に入るか入らないか，またどの部活動に入るのかを，あなたはどの程度自分で決定しましたか」と問い，「自分で決定した」（8 点）から「自分では決定していない」（1 点）まで 8 段階で尋ねた。

（3）高校時の進路選択における親の関与・自己決定

奥村他（2019）と同様，高校時の進路選択における親の関与の程度と自己決定の程度を 8 段階で尋ねた。

（4）親からの自立

奥村他（2019）と同様の「親への依存」（8 項目），「親への服従」（4 項目）の 2 因子からなる 12 項目を用いた。

（5）精神的自立

奥村他（2019）と同様の「主体的自己」（7 項目），「判断・責任性」（6 項目），「協調性」（7 項目）の 3 因子からなる 20 項目を用いた。

（6）大学生活への適応

奥村他（2019）と同様の「大学生活満足度」（5 項目），「対人不安」（5 項目），の 2 因子からなる 10 項目を用いた。

親からの自立，精神的自立，大学適応の項目について，「あてはまらない（1 点）」から「あてはまる（5 点）」の 5 段階評定とした。

Ⅲ 結果

得られた回答のうち，欠損値のあるものを除き，計 180 名（男性 70 名，女性 110 名，平均年齢 20.65 歳（標準偏差 0.78），年齢幅 19 歳～23 歳）を採用した。学年は，2 年生 38 人，3 年生 130 人，4 年生 12 人であった。

1 親の関与・自己決定と親からの自立，精神的自立，適応との関連

各因子の平均および標準偏差を Table 1 に、各因子間の相関係数を Table 2 に示す。なお、Table 2 については、奥村他（2019）で示した高校卒業後の進路選択に関する分析結果に、中学での部活選択の分析結果を加えたものである。

次に、部活決定における親の関与と自己決定の度合いが、大学進学後における親からの自立、精神的自立、大学適応にどのように関連しているかを検討するため、重回帰分析を行った。親関与、自己決定、性別（男性＝1、女性＝2 のダミー変数を投入）、親関与と自己決定の交互作用項、親関与と性別の交互作用項、自己決定と性別の交互作用項の 6 つを説明変数とする重回帰分析の結果、親への依存、親への服従、主体的自己、判断責任性、大学生生活満足度において有意な関連が認められた (Table 3)。

Table 1 各因子の平均値と標準偏差

因子 (とりうる得点の範囲)	全体		男性		女性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
親の関与 (1-8)	2.53	1.81	2.46	1.82	2.57	1.80
自己決定 (1-8)	7.49	0.99	7.46	1.11	7.51	0.91
親からの自立						
親への依存 (1-5)	2.71	0.89	2.33	0.79	2.96	0.87
親への服従 (1-5)	2.05	0.80	1.89	0.70	2.14	0.84
精神的自立						
主体的自己 (1-5)	3.17	0.68	3.40	0.71	3.03	0.63
判断責任性 (1-5)	3.16	0.72	3.39	0.69	3.01	0.70
協調性 (1-5)	3.44	0.70	3.53	0.73	3.38	0.68

Table 2 親の関与および自己決定、親からの自立、精神的自立、大学適応の各因子間相関係数

	中学 (部活)		高校 (進路)		親からの自立		精神的自立			大学適応
	自己決定	親関与	自己決定	親関与	親への依存	親への服従	主体的自己	判断責任性	協調性	大学生生活満足度
中学 (部活) 親関与	-.29 **									
高校 (進路) 自己決定	.20 **	-.10								
高校 (進路) 親関与	-.04	.31 **	-.23 **							
親への依存	-.11	.19 **	-.04	.15 *						
親への服従	-.08	.10	-.29 **	.23 **	.53 **					
主体的自己	.04	-.08	.10	.08	.00	.10				
判断責任性	.13	-.31 **	.26 **	-.22 **	-.19 *	-.16 *	.51 **			
協調性	.11	-.08	.06	.00	.25 **	.19 *	.37 **	.32 **		
大学生生活満足度	.06	-.13	.14	.03	.16 *	.16 *	.51 **	.42 **	.35 **	
対人不安	-.03	.04	-.07	-.10	-.07	-.07	-.39 **	-.27 **	-.43 **	-.33 **

注) .20以上を太字で示した。

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 親からの自立, 精神的自立, 大学適応を目的変数とする重回帰分析結果(部活)

説明変数	目的変数						
	親からの自立		精神的自立			大学適応	
	親への依存	親への服従	主体的自己	判断責任性	協調性	大学生生活満足度	対人不安
親の関与	.16 *	.08	-.06	-.29 **	-.07	-.13	.06
自己決定	-.05	-.04	.06	.10	.13	.08	-.04
性別	.35 **	.16 *	-.26 **	-.25 **	-.09	.00	.03
親関与×自己決定	.00	.00	-.08	-.09	-.09	-.08	.12
親関与×性別	.06	-.05	.02	-.02	.01	.14	.03
自己決定×性別	.11	.14	.13	.12	.14	.20 *	-.03
R^2	.17 **	.06	.08 *	.17 **	.04	.06	.02

** $p < .01$, * $p < .05$

まず, 性別による有意差として, 親への依存と親への服従は女性の方が高く, 主体的自己と判断責任性は男性の方が高かった (Table 3)。

次に, 中学部活選択での親関与が, 親への依存 (大学時) と正の関連を持つこと, 判断責任性 (大学時) とは負の関連を持つことが示された (Table 3)。

そして, 大学生生活満足度については, 自己決定と性別の交互作用が認められた (Table 3)。単純傾斜検定を行った結果, 女性の場合に, 自己決定が高ければ大学生生活満足度が高いとの結果が認められた ($\beta = .27$)。男性の場合は有意な関連はみとめられなかった (Figure 1)。

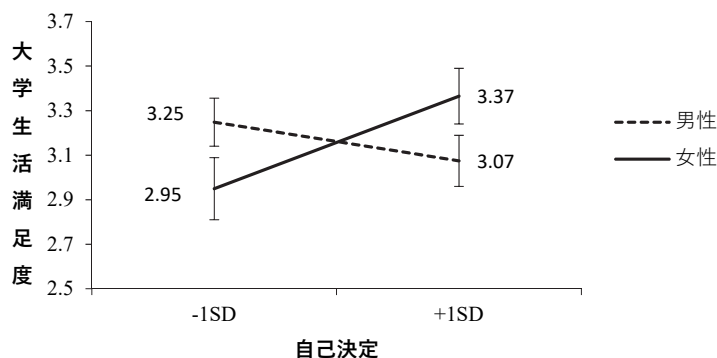


Figure 1. 自己決定と性別の交互作用における単純傾斜検定結果

IV 考察

本研究の目的は, 中学の部活選択という, 高校卒業後の進路選択ほど重要ではないにしても, 中学生生活全般に影響を及ぼす顛末とは言えない判断において, 親がどの程度関与し, 子ども自身がどの程度自己決定するのかということが, 後の大学生時点での自立や適応にどう関連しているのかを調べることであった。

1 性差について

重回帰分析の結果 (Table 3), 大学時の親との関係や精神的自立には, 性別による差があることが示された。親への服従, 依存については, 女性の方がいずれも高く, 男性より親に頼ったり親の意見に従ったりしているという結果であった。また, 精神的自立の中の主体的自己と判断責任性については, 男性の方が高かった。これは, 男性の方が女性より自己主張や責任を持つことを求められやすく, 逆に女性は, 自己主張を抑え他者に合わせることをよしとされやすいといった社会規範による影響が考えられる。

このような性差に関し, 福島 (1992) は, 男性と女性では自立の獲得過程が異なるのではないかと指摘している。それによると, 男性はまず親から分離して自分の意見が確立されていくことで, 親との自立した関係を再構成していくのに対し, 女性は親からの独立意識と同時に親との和解・信頼関係の確立がなされ, その信頼関係を通して自己の自主性を確立していくという。このような性別による違いが, 今回の結果にも現れたものと考えられるだろう。

2 親関与の影響

重回帰分析の結果 (Table 3), 親への依存と判断責任性については, 性別による差だけではなく, 親関与との関連も示された。中学部活選択における親関与が強いと, 大学生になっても親への依存が高く, 判断責任性は低くなることが示された。このことから, 中学における部活という中学生にとって決して瑣末とは言えない判断であっても, 親の関与が高いことは, 後々の大学進学後でも親への依存を高め, 判断責任性という精神的自立の一要素を抑制するものといえよう。ここで, 子どもの自己決定の方は親への依存とも判断責任性とも関連が見られなかったことから, 子どもよりもむしろ親の方のスタンスこそが, これら二つに関連しているといえるかもしれない。

前述のように青年期の心理的離乳のプロセスについて検討した落合・佐藤 (1996) によれば, 中学生の親子関係では「親が子を抱え込む」とことと「親が子と手を切る」とことを行ったり来たりする過程があることが示されている。このような子どもとの関係性の変化において, 親も難しい対応をせまられるといえるだろう。また, コールマン (Coleman & Hendry, 1999) は, 青年期の子育ての難しさの理由として, 「家族における権威関係の変容」「親役割の不確かさ」「子どもに対する監督やモニタリングの適切さ」を挙げている。これらは, 子どもの成長に伴い, それまで親が持っていた決定権や権威, 監督に対して子どもが自己主張をするようになり, 親役割が揺らぐことを指している。

平石 (2010) は, このようなプロセスにおいて, 親は手綱を緩めたり, 子どもと適切な物理的・心理的距離をとったりしながら, さまざまな決定を子どもに任せるようになることを指摘し, この微妙な距離の取り方や統制の仕方は判断がなかなか難しく, 親子によって個人差があると述べている。一般的に, 「親離れ, 子離れ」と言われるように, 親の方が「子離れ」の意識を持ち, 子どもの判断に関与しすぎないということも, 子どもの自立を考える上で重要という

ことが、今回の結果から推察されよう。

3 女性における自己決定

大学生生活満足度に関しては、自己決定と性別の交互作用が見られ、女性の場合に自己決定が高ければ大学生生活満足度が高いとの結果が得られた。決定係数が小さく、有意でもないため可能性としてしか言えないが、このことは、特に女性において、部活という小さな判断であっても、本人の自己決定を尊重することが、後々の大学生生活満足度の高さに関連する可能性を示唆していると考えられる。

女性の場合、社会規範から考えると、自己決定するよりも周囲に合わせた判断を求められやすいように思われる。また、先に述べた福島（1992）の指摘にあるとおり、男性のように親との関係を一旦切るのではなく、親との関係を保ちながら自己の自主性を確立していくと考えられる。このように、親や周囲との調和を保つことが求められやすい中において、しっかりと自己決定をする機会を経験することで、親との関係を保ちながらも自分の責任で決定する態度が育まれ、それがやがて高校卒業後の進路決定場面に生かされて大学生活における満足度の高さにもつながるのかもしれない。

4 中学での判断と大学時の子どもの自立・適応との関連

重回帰分析により（Table 3）、親への依存、判断責任性において、親の関与との関連が見られたことは、決定係数が大きくないとの制約はあるが、注目すべき点ではないだろうか。なぜなら、この結果は、中学時点での判断をめぐる親子のやり取りが、時間をおいた大学時点の子どもの自立や適応に関連していることを示唆しているからである。

今回取り上げたのは中学の部活という1つの事象である。しかし、中学から大学に至るまでの過程や、それ以前の中学に至るまでの成長過程において、親子の間では様々な判断が繰り返される。そのようなやりとりを通じて親は子どもに判断や決定を少しずつゆだね、「親離れ・子離れ」が進んでいくのだろう。そのプロセスの初段階である中学生の時期は、親にとっても子どもとの関係調整に悩む時期と思われるが、親の方が「子離れ」の意識を持ち、関与を減らしていくことが、親への依存を減らし判断責任性を育むことに関連していると考えられる。

最後に、本研究の限界として、今回の結果はあくまで大学時に想起された中学時の親関与と自己決定について扱ったものであるという点が挙げられる。今後の課題として、縦断的調査によって、中学から大学までの親子関係における親関与と自己決定の変化と、子どもの自立の関連を検討していくことが望まれる。

参考・引用文献

- Coleman, J. C., & Hendry, L. B. (1999). *The nature of adolescence. Third Edition. Routledge.* (白井利明他 (訳) 2003 青年期の本質 ミネルヴァ書房)
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (2002). *Handbook on self-determination research.* New York: University of Rochester Press.
- 福島 朋子(1992). 思春期から成人にわたる心理的自立 発達研究, 8, 67-87.
- 平石賢二(2010). 青年期の親子関係 大野久(編) エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房, pp.114-145.
- Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescents.* D.Appleton Century Company.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 奥村弥生・森田愛望・青木多寿子(2019). 大学進学時の進路選択における親の関与と進学後の自立および適応との関連 心理学研究, 90, 419-425.
- 小野寺敦子 (2014). 親と子の生涯発達心理学 勁草書房
- Smetana, J. G., & Villalobos, M. (2009). Social cognitive development in adolescence. In R. M. Lerner & L. Steinberg (Eds.), *Handbook of adolescent psychology. Third edition. Volume 1: Individual bases of adolescent development.* John Wiley & Sons, Inc.

註 ¹ 本論文は、第1著者の指導で第3著者が提出した卒業論文（広島大学教育学部）のデータを第2著者が再分析し、第1著者、第2著者でまとめなおしたものである。

Parents' Involvement and Self-determination in Junior High School Students' Club Decision Making and its Effect on the Independence and Adaptability of University Students

Tazuko AOKI*1 Yayoi OKUMURA*2, Manami MORITA*3

This study aimed to examine the relationship between parents' involvement and self-determination in junior high school students' club (optional after-school activities) decision making and its effect on the independence and adaptability of university students. Questionnaires were completed by 180 university students (male=70, female=110). The results revealed that parents' involvement in club choices was positively related to the dependency of adolescents and negatively related to decision responsibility. In addition, the case of women, self-determination regarding club decision making increased satisfaction with

university life. In conclusion, junior high school students' club decision making related to their level of independence and adaptability to university life despite the passage of time between the two stages. During junior high school, an early stage of psychological weaning, it is important that parents limit their decision-making involvement and focus on building lasting relationships.

Keywords: parent-child relationship in adolescence, independence, psychological weaning, parents' involvement, self-determination.

*1 Okayama-University

*2 Chugoku Junior College

*3 Ouchi Elementary school
